

## V オンラインでの取組のまとめ

### 1 オンラインでの学習をする上で、大切なこと

各学級の実践を振り返り、学校と家庭の間で、オンラインでの学習をする上で大切なことを、五つの項目に整理した。

#### (1) 教師と幼児児童の関係作りから始めること

画面を介したオンラインでの学習をする上では、幼児児童が、画面を介して働き掛ける教師の存在に気づき、興味をもつこと、そして、その教師と画面を介してやり取りをしようとする必要がある。そのためには、教師と幼児児童との関係性が重要である。今回は、年度が移行し、新しい担任や環境になる時期に一斉休業になったことにより、特に、担任と幼児児童とが直接関わる機会がなく、その中でのオンラインでの授業が開始されたため、どの学級も、教師と子供との関係作りが大変難しかった。そこで、以下のような方法で、教師と幼児児童の関係作りを行った。

##### ア) 事前に教師と保護者での面談を実施し、まず、保護者との関係性を築くこと

Web 会議システムを活用した授業を行う前に、どの学級も保護者と画面を介しての面談を行った。担任紹介をしたり、保護者の声に耳を傾け、思いをしっかりと受け止めて、家庭での最近の子供たちの様子を聞き取ったりして、まず、保護者との関係作りから始めた。そうすることで、子供との画面を介した学習をするときには、子供たちが、自分の身近な人（保護者）が、画面上で、やり取りをする相手（教師）に興味をもったり、保護者と教師が何気なくやり取りをしている様子や雰囲気に、安心して学習に取り組んだりすることができたと考える。

##### イ) 幼児児童との関わりのある教師がきっかけとなって関わりを広げる

幼児児童にとって、「画面を介して自分に話し掛ける人」が知っている人や、関わったことがある人であれば、聞き慣れた声で語り掛けられることに安心感を抱いたり、画面を介しても、自分の分かる言葉で教師とやり取りができる面白さを感じたりすることができるのではないかと考える。学級によっては、昨年度から持ち上がった教師もいたため、その教師が、T1 となって授業を進め、画面上での子供たちの様子をじっくりと見て、実態把握を行ったり、働き掛けたりしながら、オンラインでの幼児児童との関わりを広げた。そして、幼児児童が、少しずつ画面上での学習に慣れてきたところで、新しい担任とのやり取りを始め、担任それぞれとの関わりも広げながら、関係作りを行うことが多かった。

#### (2) 幼児児童の実態や興味・関心を把握し、オンラインでの活動・学習を考えること

##### ア) オンラインでの活動・学習を実施する目的とねらいについて

今回のオンラインでの取組では、幼稚園から小学部までの子供たちを対象としていたため、生活年齢や実態、発達段階によって、オンラインでの授業で、できることや可能なことが異なっていた。そのため、同じオンラインでの授業であっても、幼稚園と小学部では、その目的や、やり方、教師が指導及び支援する対象も異なっていた。幼稚園段階の目的は、「家庭での幼児の様子の実態把握」、「家庭での親子活動を教師がオンラインでサポートをする」「保護者への助言・支援（家庭生活支援）」ということが挙げられる。小学部段階では、「家庭での児童の様子の実態把握」「教師と児童（個別・集団）との学習を行う」ということであり、それぞれの目的に応じて、教師は、授業の中でのねらいを設定したり、活動内容を組み立てたりする必要があった。

また、小学部1年生の実践で挙げられたように、Web 会議システムを活用した授業は、対面での授業とは異なり、教師が幼児児童の様子や反応を把握できる範囲が限定され、デジタルの映像や音の影響によって、その場の雰囲気が伝わりづらいという課題があった。そのため、対面での授業以

上に、ねらいを絞って、学習内容を精選することで、教師が画面を介して子供を見る視点や評価の視点が焦点化され、授業改善に生かしやすくなるのではないかと考えられる。

#### イ) 活動内容について

活動内容を設定するに当たって、子供たちの興味・関心を知ることが重要であった。今回は、年度初めの5月から実施した取組であったため、アセスメントの結果や前年度の担任からの聞き取り、保護者からの情報を基にしたり、画面を介して子供たちと関わり、指導を積み重ねたりしながら、幼児児童の好きなことや得意なことを把握し、幼児児童が思わずやりたいと思う活動の設定や教材作りを行った。そのためには、子供の強みや、興味・関心、学習課題を上手く組み合わせ、学習内容を考えることが大切であった。また、提示する教材が、子供たちの興味・関心を生かしたもので、既習した題材等を生かした馴染みのある教材であることで、子供たちの視線が画面に向かい、そこで働き掛ける教師の存在に気づき、やり取りを生み出すきっかけにもなったと考える。

#### ウ) 活動時間

対面の授業とは異なり、教師が直接、手にとって一緒に取り組んだり、教えたりすることができないため、活動時間は、子供たちが、おおよそ一人で画面に向かい教師とやり取りしながら取り組むことができる時間として、20分程度で設定しているところが多かった。一方で、子供によっては、対面での授業とは異なり、タブレット端末やパソコン、テレビでの画面を介したやり取りだと、集中しすぎて疲労感が増してしまう可能性もあるため、そのための配慮が必要であった。

#### エ) 参加人数

対面での授業と同様に、子供の実態やねらいに応じて、参加人数を決めることが大切である。例えば、個に応じた指導、活動を行う場合は、教師と一対一で授業をすることで、子供のペースに合わせたやり取りや、好きなこと、できることを生かした活動を行うことができる。また、小学部の学級の実態によっては、友達の顔が画面に映ることで注目し、より、教師や友達とのやり取りが広がってほしい、教育活動再開前には、学校や学級の友達のことを思い出し、登校に期待感をもってほしいというねらいから、学級の数名の子供たちで授業を行い、一斉の指導をするということもできた。

### (3) Web 会議システムの特性を踏まえた見せ方、聞かせ方の工夫をすること

#### ア) 見せ方の工夫

見せ方の工夫として、主に3点挙げる。1点目は、Web 会議システムの様々なアプリケーション機能を活用することである。子供たちが、授業を進める教師の話に注目できるように、子供側の画面をリモートで操作して、話をする教師の画面のみを拡大して映したり、朝の会などの教師とやり取りをする活動では、パワーポイント資料を画面に共有して映しながら進めたりするなど、様々なアプリケーション機能を活用して授業を行うことで、子供に分かりやすく伝えたり、働き掛けたりすることができた。

2点目は、様々な情報機器を活用するということである。幼児児童が、学習を行う家庭では、タブレット端末やパソコンの画面を、子供たちが見やすいようにテレビの大きな画面に映し出している家庭が多かった。そうすることで、子供たちの視線が正面を向きやすくなったり、大きな画面によって、教師や友達の様子が見やすくなったりするという点において効果的であった。また、教師が、授業を行う際には、パソコンに内蔵されているカメラのみを使うのではなく、タブレット端末や、パソコンにUSBで接続できるWebカメラを用いることで、映像を配信する際に、教師の動きをカメラで追ったり、すぐに、カメラの向きを変えたりすることができるため、活動内容や見せた

い物に合わせて、情報機器を選定するということも大切であった。

3点目は、授業を行う教師の動きや表情を豊かに大きく表現するということである。対面での授業でも、日々、心掛けていたことだが、画面を介したやり取りでは、接触を伴う関わりができないことや、教師の動きも画面を通すことで平面に見えてしまうということが難しい点であった。そのため、いつも以上に、動きや表情に変化や、強弱、緩急を付けて、大きく表現することが大切であった。

#### イ) 聞かせ方の工夫

聞かせ方の工夫として大切なことは、実態に応じて子供が分かる言葉を用いて話し掛けることである。特に、言葉でのやり取りが難しい段階の子供に対しては、見せ方の工夫と併せて、働き掛けることが大切である。また、対面での授業と同様に、間の取り方を工夫したり、「いくよ。」「せーの。」などと期待感をもたせるような言葉を用いたりすることで、幼児児童が、自ら教師に語り掛けたり、教師の言葉を聞こうと耳を傾けたりする姿につながるのではないかと考えられる。

#### ウ) 幼児児童の反応への対応

画面上でのやり取りは、通信環境により、映像や音声にタイムラグが生じ、幼児児童の様子に即座に反応することが難しかったり、教師の言葉が聞こえていなかったりすることがある。そのため、子供たちの様子や反応に目を配りながら、話す速さを調整したり、幼児児童の反応を待ったりしながら進めていくことが重要だった。また、集団での授業を行う場合、教師側の画面に参加する幼児児童全員の顔が映らないこともあり、全員の様子に目を配りながら授業を進行することが難しいという課題があった。そのため、授業を進める教師（T1）、幼児児童の様子を観察しT1に伝える教師（T2）など、それぞれで役割分担をし、チームティーチングで指導を進めることで、子供たちの様子や反応を見落とさずに学習を行うことができた。

#### エ) 機器の設置の仕方等による工夫

オンラインでの授業を行う際には、使用するパソコンやタブレット端末のカメラの位置を、幼児児童の表情や、教材を操作する手元などの様子が映りやすい位置に設置することが子供の反応を捉えて進行する上で大切である。また、幼児児童は、画面に注目することが多いので、その視線の先（例えば、画面の上部）にカメラを設置することで、教師がその様子や反応を捉えて、言葉掛けを行い、スムーズに指導を行うことができた。

### (4) 家庭での学習環境を整えること

幼児児童にとって、家庭は、生活の場であり、自分の好きなことができる場、家族と一緒にくつろぐことができる場であると考えられる。そのため、オンラインでの学習をする際、子供たちは、家庭という生活の場が、突然、授業の場となり、そこで学習をすることへの戸惑い、自分の好きなことができなくなるのではないかと不安を感じている様子がうかがえた。使い慣れたテレビやパソコン、タブレット端末から教師の声が聞こえたり、教師の姿が見えたりすることで、興味や関心をもった子供もいた一方で、その場を離れたたり、泣き出したりする幼児児童がいた。また、好きなおもちゃを手放せなかったり、家の中にある物に注意が逸れて活動に参加できなかつたりするということがあった。そのような様子に対して、以下のような学習環境を整える工夫が考えられた。

#### ア) 活動前の準備と学習環境を整える工夫

活動前の準備として、主に、2点挙げる。1点目は、オンラインでの学習や活動をすることを子供たちが生活の一部として受け入れられるように、事前に保護者が活動の予告をすることである。2か月間の休業期間を過ごした子供たちにとって、オンラインでの活動という新しい活動に向かう

ためには、そもそも「Zoom とは何なのか」、「どのようなことをするのか」を一つ一つ丁寧に伝え、教える必要がある。そのために、保護者と教師が画面上で話をしている場面を実際に見せたり、のびのびチャンネルで配信した「Zoom をやってみよう」という Web 会議システムについての説明動画を見たり聞いたりして、オンラインで画面を介して、教師や友達の様子を見たり、話をしたりすることができるものであるというイメージをもてるようにした。2点目は、幼児児童が、オンラインでの活動に気持ちを向かえるようにするために、室内の環境を整えたり、直前までしていることを納得して終えたりしておくことである。保護者に協力してもらいながら、活動前に、使っていたおもちゃやタブレット端末などを子供と一緒に片付けて、遊びの「おしまい」を伝えることで、気持ちを切り替えてオンラインでの活動に取り組めるようにすることである。また、おもちゃ等を、活動中は子供の視界に入らない所に置いたり、布を掛けて見えなくしたりして、活動中に注意が逸れないようにする工夫も大切であった。

#### イ) 活動中の環境を整える工夫

活動中の工夫としては、気持ちを切り替えて、落ち着いて学習や活動に取り組めるようにするために、学習で使用する部屋や椅子、机を新たに設置している家庭もあった。幼児児童にとって、学習で使う物があることで、気持ちを切り替えるきっかけにもなったと考える。また、工作をしたり、素材に触れたりする活動や教師と画面を介しながら言葉でのやり取りが中心の活動では、座って活動する時間が長くなる。よって、その児童に合わせた椅子や机を使用することで、姿勢が安定するため、手元や画面を注目し続けることにもつながると考える。

### (5) 保護者との協力・連携

今回の活動・学習は、幼児児童と一緒に活動を行う保護者の協力がなければできない取組であった。取組を通して、幼稚園と小学部段階では、オンラインでの活動における教師と保護者の役割の違いが見えてきた。

幼稚園段階では、保護者が子供と関わりながら活動をし、それを教師がオンラインでサポートし、助言するという役割であった。

小学部段階では、保護者が教師の言葉を子供の耳元で復唱したり、子供が自ら教師に働き掛けられるように、サポートをしたりする役割を担い、教師と連携しながら活動に取り組んでもらった。このように、年齢段階、幼児児童の実態によって、保護者と子供との関わりが変化してくるため、教師が活動を行う際の配慮事項を具体的に伝えたり、保護者から子供の様子を聞き取れるように問い掛けたりすることが大切である。また、活動の授業改善を行うには、幼児児童の様子をそばで見ている保護者からの情報を生かすということが重要であった。授業後に、教師と保護者で振り返りを行ったり、メールで意見を求めたりすることで、画面上では見えない子供たちの様子を知り、次時の授業改善につなげ、保護者と協働しながら、子供の成長を促すことができるのではないかと考えられた。

## 2 オンラインでの行事をする上で、大切なこと

三つの行事を振り返り、オンラインでの行事を行う上で大切なことを、四つの項目に整理した。

### (1) 幼児児童の興味・関心に基づく活動設定

オンラインでの行事に子供たちが参加するためには、テレビ画面に視線を向け続けることが必要であった。テレビ画面に視線を向けることで、活動内容を理解して、行事を楽しむことができるように子供たちの興味・関心に基づく活動を設定する行事が多かった。オンラインでの行事で多く行われた活動は、ダンス、歌、絵本の読み聞かせであった。これらの活動は画面に視線を向けたことで活動内容が理解しやすいものであった。画面を見ながら踊ったり、歌を口ずさんだりするなど、様々な表現でオンラインでの行事を楽しむことができていた。ダンスと歌は動きを伴う活動であったが、絵本の読み聞かせは、画面をじっと見つめることが多く動きを伴わない活動であった。動きを伴わない活動であっても、子供たちにとって、なじみ深い絵本であることや身近な教師が登場することで興味をもち、画面に視線を向けることができた。

### (2) 映像教材を用いること

きらきらコンサート（音楽鑑賞会）や小学部チャンネルでは、教師が作成した映像教材を用いることが多かった。きらきらコンサートの映像教材では、曲に合わせてアニメーションを付けたり、歌詞を付けたりしたことで、映像に興味を示し、画面に注目することができた。小学部チャンネルでは、ダンスや手遊びを映像教材にして用いた。映像教材を画面に映すことで、注目すべき対象が明確になり、画面に映っている教師や友達を見て、振り付けや手遊びをまねすることができていた。従来行事であれば、活動は一度しか取り組めないことが多いが、映像を繰り返し見ることで、自分のお気に入りの歌やダンスに何度も取り組み、楽しむことができた。

### (3) 落ち着いた環境を作りやすいこと

従来行事は、他学年や保護者、来賓など多くの人の前で発表をすることが多い。本校の子供たちの中には、大勢の人の前で発表することを苦手としている子供もおり、もてる力を十分に発揮できないまま行事を終えてしまうことがある。しかし、オンラインでの行事であれば、大勢の人の前に出ることはなく、普段過ごしている教室から発表をすることができる。小学部チャンネルでは、司会を務めた子供は緊張感を感じることなく、大きな声で進行をすることができていた。交流及び共同学習では、初めて関わるA小学校の児童に向かって、自分の自己紹介カードをカメラに向かって見せたり、自分の名前や好きなことを伝えたりすることができていた。人前に出て発表したり、人前で活動したりすることは幼児期、児童期の子供たちにとって、大切な経験であるが、人前で発表を苦手としている子供にとっては、自分が普段過ごしている教室等の落ち着いた環境から発表をすることで成功体験を重ね、発表に対して自信をもつことができるようになると考えられる。

### (4) 画面越しでやり取りすること

オンラインでの行事であっても、他学年の友達や教師と関わるができるように、小学部チャンネルでは司会の学年が「集まりの歌」を歌った。「つぎは〇年生？」の歌詞を歌うと、呼ばれた学年が写るようにホストが画面を切り替え、手を振って反応するという画面を介したやり取りを行った。交流及び共同学習では、交流校の子供と自由にやり取りをする時間を設けたことで、お互いに相手を意識して自己紹介をすることができた。Web 会議システムを用いて各教室から行事に参加したとしても、他学年や他学部の幼児児童や教師が画面に映ると知っている友達や教師の名前を言葉にしたり、呼び掛けたりする子供もいたことから、オンラインでの行事では、画面越しであっても関わる機会を設けることが通常の行事と同じように必要であると考えられる。

### 3 まとめと今後の展望

#### (1) オンラインでの学習

今年度は、新年度開始時の教師と幼児児童との関係性がまだ十分に築かれていない時期に、オンラインでの学習が導入され、また、オンラインでの学習の取組の前例や、蓄積がない中で、できること、できそうなことに試みながら手探りでの授業開始となった。その中で、実践を積み重ねたり、教師同士で意見を交換し合ったりしながら進め、上記に挙げた五つの視点が、本校の知的障害を伴う自閉症の子供たちにとって、オンラインでの学習をする上で大切なことであった。

2月現在、学校が再開し、日々の教育活動を通して、私たち教師は幼児児童と信頼関係を築き、幼児児童の興味や関心、得意なこと、苦手なことなどの様々な実態を把握し、指導をしている。現在の状況で、再び、学校と家庭で、オンラインでの学習を実施することになれば、これまで述べてきた実践の成果と課題を踏まえ、より、幼児児童一人一人に応じたオンラインでの学習の指導内容や指導方法などを計画したり、新たな可能性を探ったりしていくことができると考える。

#### (2) オンラインでの行事

オンラインで行った行事の取組から、子供たちの興味・関心に基づく活動を設定し、映像教材を用いることでオンラインでの行事に参加しやすくなると考えられる。また、子供たちが発表をする際にも、落ち着いた環境を作りやすく、もてる力を発揮しやすくなり、成功体験を重ねることができると考えられる。オンラインでの行事であっても、画面越しで友達や教師と関わることが、行事を計画する上で重要であった。しかし、各行事の課題として、画面越しでやり取りをする難しさが挙げられた。今後は、情報機器の扱い方を教師が熟知し、画面越しであっても自身の働き掛けが相手に十分に伝わり、相手も反応しやすいような活動を検討することが課題である。

さらに、オンラインでの行事は、初めての取組が多く、準備や運営に時間を要した。そのため、学級や学部で挙げられた反省の多くは、準備や運営に関することであった。また、子供の評価の視点も画面に視線を向けていたか、画面に映る教師や友達の動きや歌をまねしていたかなど、オンラインでの行事に参加できたかが中心となっていた。今後は、通常の行事のように、準備や運営に関するだけでなく、行事のねらいや目的に対して、子供たちが何を学び、どのような力を身に付けることができたのかを評価することで、オンラインの特性を踏まえた目標を立て、活動内容を計画することにつながると考えられる。

### 4 課題

オンラインでの学習と行事で、共通して、画面を介したやり取りの難しさが挙げられた。映像や音声にタイムラグが生じることで、教師が画面越しに、子供たちの様子に反応することが難しかったり、教師の言葉が届かなかったりすることがあった。また、画面越しのやり取りであるため、相手との距離感や視線の向きなど、自分が働き掛けられているという実感を抱くための手掛かりがなく、子供たちは教師や友達の言葉掛けに反応することが難しかった。また、教師は、対面での学習や行事に比べ、オンラインでの経験が明らかに少ないため、対面での活動との違いを捉えつつ、オンラインという場での目的やねらいを立て、指導内容を考えることに試行錯誤した。情報機器の操作に関しては、活動中に画面が静止したり、音声途絶えたりするなどのトラブルが生じてしまうことがあり、それによって子供たちの活動や集中が途切れしまうことも課題であった。

以上のことを踏まえ、今後の課題を以下に述べる。

- 画面越しであっても、自分の働き掛けが相手に伝わったり、相手の働き掛けに対して、すぐに反応したりして、やり取りをしながら展開するような活動内容とそれを実現するような情報機器の使い方を検討すること。
- 様々なトラブルや、子供の反応を予想し、オンラインの特性を踏まえた活動内容を計画すること。
- 画面越しのやり取りを円滑にするためにも、教師が情報機器の扱いに慣れ、トラブル（通信が途絶える、ハウリング、画面の静止など）に対応できるようになること。

# 【別紙資料】



## 活動で使用した曲や絵本の作詞者と作曲者名

## きらきらコンサート

曲名	作詞者	作曲者
とんとんとんとんひげじいさん	不詳	玉山英光
おばけなんてないさ	槇みのり	峯陽
きゅうしょく	谷川俊太郎	谷川賢作
くじら	谷川俊太郎	谷川賢作
絵本「おべんとうバス」	作・絵 真珠まりこ	
校歌	狩野光夫	早坂みどり

## 小学部チャンネル

曲名	作詞者	作曲者
パプリカ	米津玄師	米津玄師
きらきらぼし	フランス民謡	フランス民謡 武鹿悦子訳
絵本「おおきなかぶ」	A. トルストイ再話 内田莉莎子訳 佐藤忠良画	
やきいもグーチーパー	阪田寛夫	山本直純